

**オープンウォータースイマーのリスクマネジメント意識について
三宅島オーシャンスイムリレーフェスティバル参加者の
リスクマネジメント意識から
A Risk Management Consciousness for Open Water Swimmers
(From Miyake Island Ocean Swim Relay Festival in Japan)**

1K06A239

指導教員 主査 中村好男先生

村木昇人

副査 木村和彦先生

【第1章 序論】

近年、わが国では高齢化や生活習慣の変化に伴い、生活習慣病、及びメタボリック・シンドロームが社会的に問題視されており、健康への関心が高まっている。生活習慣病やメタボリック・シンドロームを予防する方法として、運動療法が注目されているが、その中でも水泳は幅広い年代に実施されているスポーツである。その水泳の延長線上のスポーツとして注目されているのが、オープンウォータースイミングである。海や湖といった自然の中で行うこのスポーツは開放感があり、また北京オリンピックからはオリンピック正式種目として採用され、世界で実施率をのばしている。しかし、オープンウォータースイミングは自然の中で行われるため、競技者の安全は保障されておらず、これまでに水溺事故も数多く起こっている。そのため、大会運営側がリスクマネジメントを行い、安全を保障するだけでなく、参加者が自らリスクマネジメントを行い、セルフレスキューを行うことも重要である。本研究では、さまざまなリスクが存在するオープンウォータースイミングに対して、大会運営側でなく、参加者がどのようなリスクマネジメントを行っているかを調査し、今後のオープンウォータースイミングの安全にどうすればつながるのかを検討した。

【第2章 方法】

三宅島オーシャンスイムリレーフェスティバル参加者の男女48名に大会終了後質問紙を配布し、回答後に回収した。分析にはSPSSを使用した。

【第3章 結果】

男子と女子でどのようなリスクマネジメントを行っているかという点では、日焼けに対してのリスクマネジメントにおいて有意差 ($p < 0.001$) が認められた。脱水症状と海の生物に対するリスクマネジメントには有意差は認められなかった。過去に被害を受けたことがあるグループとないグループでは脱水症状の項目において有意差 ($p < 0.05$) が認められ、日焼けによる火傷と海の生物による被害の項目では有意差は認められなかった。水泳歴の長期と短期のグループにおいて、脱水症状のリスクマネジメントに関して有意差 ($p < 0.05$) が認められ、その他の項目では有意差は認められなかった。競泳経験があるグループとないグループではどの項目にも有意差は認められなかった。

【第4章 考察】

今回の調査では、グループ間よりも、参加者個人によって大きく差が表れた。参加者側にリスクマネジメントをするだけの知識、特に海の特長や海洋生物についてといった普段触れる機

会が少ないものに対しての知識が足りてないということがその一因であることが考えられる。そのため、大会運営側が積極的に参加者に対して、知識やリスクマネジメントの重要性を説いていく必要があることが示唆された。また、参加者がセルフレスキューをより行いやすいように、日陰を作るために参加者用のテントを用意したり、給水ポイントやスポーツドリンクを用意したりするなど、大会運営側の配慮によってオープンウォータースイミングにおいてのリスクはさらに減ることが考えられる。